様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１４日現在

研究種目：若手研究スタートアップ
研究期間：2008～2009
課題番号：20820013
研究課題名（和文）　佐藤春夫のジャンル意識とナショナルアイデンティティに関する研究

研究課題名（英文）　Studies on Sato Haruo’s genre recognition and his national identity

研究代表者
河野　龍也（KONO TATSUYA）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20511827

研究成果の概要（和文）：佐藤春夫のジャンル意識とナショナルアイデンティティの形成にとって、1920 年の中国旅行は重要な意味を持っていた。日本の軍事筋が握っていた当時の歴史資料を参照することで、春夫の紀行文を客観的に検証し、その成果を中国のシンポジウムにて紹介した。また、春夫の敗戦直後の肉筆資料を分析することで、戦争詩人としてのイメージからいかに戦後社会への適応を図ったのか、そのプロセスを具体的に確認することができた。

研究成果の概要（英文）：Sato Haruo’s travel to China in 1920 played an important role in the formation of his genre recognition and his national identity. By consulting the historical materials left by the Japanese military at that time, what his travel writings didn’t say could be pointed out. I had an occasion to show the result in a symposium held in China. In addition, Haruo’s notebook which he used just after the defeat of the war was discovered in 2009. By analyzing it, I could confirm the process how he, who wrote many patriot poems in the wartime, could adapt to the post-war society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,330,000	399,000	1,729,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近・現代文学　国文学　日本史　文学論

１．研究開始当初の背景

(1)大正期のリベラリズムがやがて民族主義へと崩壊して行くプロセスの根底には、外発的な日本の近代化に伴う無自覚なナショナリズムの形成が影響しているものと見られる。その中で、詩歌と散文との使い分けに日本人と世界人という二つの自己を割り振って行った佐藤春夫の文化意識は、文芸ジャンルを軸とする点で特殊なものと見られるのだが、これは従来の研究ではほとんど取り上げられてこなかったテーマである。

(2)日本文学と中国・台湾文学研究者の間で、佐藤春夫に関する評価の懸隔は甚だしい。しかし、分野間の交流が未発達であったため、その原因を追究することはおろか、懸隔の存在すらほとんど意識されていないという問題が存在した。

(3)佐藤春夫の肉筆資料、特に絵画資料の所蔵状況がつかめてはおらず、その全貌を把握するための基礎作業が必要であった。

２．研究の目的

(1)文学者と美術家、詩人と小説家という複数の顔を使い分けながら創作活動を続けた佐藤春夫に光を当てることで、その自我意識形成の様相に迫り、ひいては近代日本における芸術ジャンルとナショナルアイデンティティとの不可分の関係を明らかにすることを目標にした。

(2)春夫の中国・台湾旅行をアイデンティティ形成の重要な転機と考え、現存の資料をできるだけ多く駆使してその実態を把握することに努める。またその研究成果を海外の研究者に示し、研究交流の端緒を開くことを目標にした。

(3)佐藤春夫の肉筆資料の所蔵先一覧を作成し、今後の研究が依拠すべき情報的な基盤を提供することを目標にした。

３．研究の方法

(1)概要

佐藤春夫の批評意識・ジャンル意識については様々な見解があるが、特定の要素だけを取り出すのではなく、なるべく多面的に、かつ恣意的判断を警戒しながら位置づけて行くため、本研究では、テクストの精読と徹底した資料調査による裏付け作業を原則とした。その上で次の 3 点に取り組むこととした。

①従来ほとんど注目されてこなかった初期の美術家としての活動を発掘することで、ジャンル論とアイデンティティとの交錯が用意されて行く原点のありようを明らかにする。その基礎的なデータを確保するため、春夫の実作をリストアップしたデータベースを整備し、併せて大正初期の美術理論関連の資料を広く収集する。

②〈詩人〉と〈小説家〉という芸術家としての自己演出が、ナショナルアイデンティティの問題として再編成される転機となった 1920 年の台湾・福建旅行の実態を、清末民初の中国社会の変動とともに調査する。

③佐藤春夫の肉筆資料を周辺資料と照合の上整理・分析し、春夫自身の問題意識と、読者を想定した表現戦略との間のズレを中心に、作品生成の現場を復原する。

なお、年次計画を以下のように設定した。

(2)平成 20 年度研究計画

美術関係資料の基礎調査を開始する。佐藤春夫は文業のかたわら多くの絵画作品も手がけた。しかし、現物が分散保存されているため画業の全貌がつかみにくく、先行研究も乏しい。そこで所蔵情報を確認の上、リストを作成する。さらに現物を確認し、将来のデータベース構築のため、調査結果を逐次入力して行く。

一方、データベースの有効利用に向けての基盤整備をも行う。明治末期より大正期に到る西洋美術思潮の移入と文学への応用状況を調査し、春夫の画業を相対的に俯瞰できる視座を確保するため、特に春夫が親炙した後期印象派の絵画理論受容について、印象派からアヴァンギャルドに到る美術史の展開を押さえる。具体的には、国立国会図書館等で『白樺』『美術新報』『方寸』『みづゑ』など美術雑誌の閲覧と、美術を題材にした文学作品の網羅的な蒐集と分析を進めて行く。

リベラルな文化相対主義者から戦争詩人へという〈文明批評家〉としての春夫の展開は、功罪を論じるあまりその具体的な筋道は明らかにされてこなかったが、この問題について上記の作業をもとに一つの仮説を立て、検証していくこととする。

また、美術資料の蒐集と同時に、文学関係資料の調査も行う。創作ノート・原稿類、関連書簡、旧蔵書をもとに、春夫の詩の代表作『殉情詩集』(1921) の検討を行う。失恋に伴う極めてプライベートな感情を、その主観性を保持しつつ普遍化するという逆説的な言語表現の場において、春夫はまず、文語定型詩という表現形式を選択した。口語自由詩が主流となっていた大正詩壇では特殊な活動である。同時代言説の調査とともに、上記の推移稿の位置づけによって、詩集の意図を明らかにして行く。

その上で、同じ恋愛事件を小説化した『剪られた花』(1922) との比較も試みる。この小説は、事件そのものの経過報告ではなく、失恋時の感情から遠ざかり、詩が書けなくなるプロセスの言語化という、特殊な表白の形を取っている。この事情を春夫の〈詩人／小説家〉アイデンティティの自覚的な使い分けという観点から把握し、詩集の分析と統合させて行く。〈絶対／相対〉という二項対立でイメージされていた〈詩／小説〉が、〈日本人／世界人〉という二項対立へと再編成されて行く過程を、厳密なテクスト分析と具体的な資料調査を交えて明らかにしていく予定である。それは広く美術と詩歌・小説ジャンルの境界の考察に資する研究ともなる。

(3)平成 21 年度研究計画

佐藤春夫の文明観に転機を画した台湾福

建旅行の実態調査を推進する。1920 年、春夫の旅行時の台湾は、武官総督期から文官総督期への転換期であり、文化政策が課題となり始めた当時、総督府の統治方針は、内地人と漢族系住民・先住民族との同化路線か平等路線かで政策が二転三転していた。日本帝国の版図に入った異民族を、日本人としていかに認定するか。まさに国民国家の虚構性が露出するそのような現場に、春夫は立ち会っていたのである。文化的・民族的境界性と国民国家の境界とのこうした齟齬を、春夫は紀行文において、作中人物の使用言語の相違を軸にあぶり出して見せている。春夫にとって台湾旅行は、文化の相対性を現実に認識する契機となった。それでは、文化的な「他者」との出会いはどのように果たされたのか。テクスト分析と資料調査の両面から考察する。

植民統治政策・先住民族蜂起事件の実況・中国大陸の軍閥動向に関する資料は国内で収集するには限度があり、また 1920 年当時の原紙・マイクロフィルムはその多くが台湾の研究機関でなければ見られない。これらを現地において網羅的に閲覧し、春夫の台湾旅行を取り巻く政治的・社会的なコンテクストを掘り起こす必要がある。この調査では、国内で閲覧できる電子図書館を活用しながら、その欠を現地の各機関にて補う計画である。

この調査をもとに、台湾歴訪記事「霧社」(1925)「殖民地の旅」(1932)の記述を、当時の歴史的コンテクストと対照させながら論じて行くことが可能になる。春夫は、国民国家の虚構性を観念的なレベルにおいてではなく、実際の言語使用という明瞭な形で認識し、テクスト内空間を複数の言語コードによって重層化する方法を取っている。春夫の言語文化相対主義とナショナルアイデンティティの関連性について考察する計画である。調査の成果は国内だけでなく海外の学会に報告の機会を求め、批正を仰ぐとともにこれを通じて国際的・学際的な人的ネットワークの拡充を図って行くことにも努める。

なお、美術資料調査は、平成 20 年度より継続して行う。絵画作品の画題・年代の特定、同時代の画壇における評価などリストの項目数を増やし、情報の詳細化を図る。これら二つの基礎調査をもとに、佐藤春夫のジャンル意識とナショナルアイデンティティそれぞれの形成過程と両者の交錯について、より説得力のある仮説を提示する計画である。

４．研究成果

(1)概要

海外における学会開催の趣旨と日程の関係、および新資料の発見等によって、当初の年次計画に変更が生じた。また研究過程の中で対象作品の優先度も変化した。扱う具体例（作品）　に変化はあったものの、博士論文の執筆とも相俟って、調査結果を活かしながら所期の研究テーマに関する考察を推進することができた。各年次の成果は以下の通りである。

(2)平成 20 年度の成果

佐藤春夫は近年、講談社版旧全集の未収録作品から書簡までを網羅した新全集（臨川書店）が完結し、時代と共に歩んだ作家の全貌に近づくことが可能になった。だが、半世紀に及ぶ文学活動の蓄積は膨大で、よく知られた名作に限っても、自筆原稿から初出・単行本に至るまで複数のテクストが存在し、作品構造の根幹にかかわるような訂正が施されている場合も少なくない。本研究における調査の中で、これらの訂正箇所が、視点や人称の取り方など文章構成の技術的問題でありながら、それが作品内容にも緊密に関わっていることが明らかになった。そのため、ここでは春夫の代表作と目される『田園の憂鬱』（1919）の 6 種類に及ぶ諸稿の比較検討に入った。「美術」と「詩歌」との間を往還していたデビュー前の春夫が、いかに「小説」形式を獲得しようとしたのか、その方法的な試行錯誤のプロセスを解明することに努めた。

初期春夫の小説に多用される一人称形式は、特定の相手に語りかけるというプライベートな「場」の設定を不可欠の要素としていたが、『田園の憂鬱』を三人称小説へと改変して行くなかで、春夫はそうした「場」の放棄を余儀なくさせられる。自己肯定の根拠を失った主人公の造形は、春夫における「小説」形式の獲得過程そのものの産物であるということが本作の生成研究を通じて明らかになった。

私見によれば、1915 年前後の美術受容と、1920 年の台湾・福建旅行を契機にしたナショナルアイデンティティの反省的自覚とが春夫のジャンル意識形成における重要な結節点となっているが、『田園の憂鬱』を題材した今回の分析により、二つの時期の間に存在した間隙を埋めていく足掛かりを得ることができた。

(2)平成 21 年度の成果

佐藤春夫の中国旅行について国際学会で報告し、これをもとに論文を執筆・発表した。同じ旅行中の台湾紀行に関しては、90 年代以降現在に至るまで論文が続出し、研究の蓄積もかなり進んでいる。だが、対岸厦門地方の旅行記（『南方紀行』1921）については、外部資料による裏付け調査を含め、本格的な研究は皆無である。本研究では、1920 年当時の厦門の政治情勢と地理情報を、当時の旅行指南書や写真、日本領事館作成の報告書（国立公文書館公開）などに基づいて詳密に復原することに成功し、春夫の紀行文における情報

選択の特徴を浮かび上がらせることができた。その成果は博士学位論文と、中国上海における国際学会での発表に活かされている。とりわけ後者の討論において、中国の研究界における佐藤春夫のネガティヴなイメージに触れ得たことは、研究の立脚点を確認するためにも極めて意義深いことであった。

また、課題研究の過程において、春夫が信州佐久での疎開中に使用した詩の創作ノートを調査する機会があった。大正期に形成されたナショナルアイデンティティの一端は、昭和に入り、戦争詩という極端な形をとって発揮されることになるが、敗戦により状況が一転した戦後社会において、春夫は改めて自己のアイデンティティを再構築する必要に迫られた。文学者において、それはとりもなおさず言葉を通じて行われるのであるが、ノートに残された詩の推敲過程をつぶさに辿ることで、春夫の自己回復の軌跡をメディア論・表現論的な側面から追究することができた。このノートの発見により、大正作家の芸術家アイデンティティの形成過程を跡づけるという当初の構想を超えて、戦後社会への適応というより広い視野から研究テーマを捉える視座を与えられたことは、大きな収穫であった。この点に今後の研究の新しい展望が見えてきたものと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 河野龍也、佐藤春夫が描いた中国―『南方紀行』と厦門の 1920 年―、日本学研究―2009 年上海外国語大学日本学国際論壇紀念論文集、査読有、1 巻、2009、209－213

② 河野龍也、佐藤春夫『田園の憂鬱』成立考―〈芸術的因襲〉の位置づけをめぐって―、東京大学国文学論集、査読有、4 号、2009、121-136
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/24405

〔学会発表〕（計１件）

① 河野龍也、佐藤春夫が描いた中国―『南方紀行』と厦門の 1920 年―、2009 年上海外国語大学日本学国際フォーラム、2009 年 6 月 13 日、上海外国語大学

６．研究組織
(1)研究代表者
河野　龍也（KONO TATSUYA）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20511827

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：